

行くぜ、大学。

北野 慎一郎

先日、後期試験を終え、社会人学生としての一年間があっという間に終わった。ということで、社会人学生をスタートした時の気持ちを振りかえって書いてみたい。なにげに読んで、「自分もやってみようかな、大学に戻ろうかな」と、読んだ方に少しでも思ってもらえたら、幸せに思う。

きっかけ

昨年3月、河北ウイークリーせんだい（無料週刊タブレット紙）で、東北福祉大の社会人聴講生募集の情報を見つけた。それは、街の“カルチャーセンター”の教養コースに飽き足らない私の興味を引くに十分だった。一日限りや長くて数日間の“セミナー”ではない。れっきとした大学の、しかも正規の授業を一年間受講するという、手応えありありのコース。私の心の中に、ぼによつと熱い気持ちが巻き起こった。

私たちの周りで

世の中の変化のダイナミックさとそのスピードに、近頃驚かされないか？私は、アワワと驚いてばかりである。政治経済・国際関係・安全保障など、目まぐるしく変化し、しかも今まで想像もできなかった未知の領域と言えるレベルまで。みなさんも覚えているだろう。世界中が驚いたブレグジット（英国 EU 離脱）や米国のトランプ大統領就任も最近の出来事である。専門家とて予想しがたい異次元の状況が目の前に現れつつあるのが現代だ。

こんなに刺激が多く変化も激しい時代で、なんにもしないでボーツとしているのはおかしい。そう思い始め、自然に「学びたい」という気持ちが高まってきた。いいぞ、いいぞ。とはいうものの、学校を卒業して、いったん学習から離れてしまった身には、やはり勉強に対する敷居は高いんだなあ。

インプットとアウトプット

学生時代は毎日が知識のインプット（習得）の日々だった。しかし、学校を卒業し勤めだしたら、仕事絡みのインプットはあれど、多くは今まで蓄積したもののアウトプット（消費）の連続で、気がつけば人生も後半のステージ。きっと、わが身も放電しきってスッカスカに違いない。そう考えると、いてもたってもいられない。例の熱い“ぼによつ”にほだされた私は、3月の春の陽気の関係もあろうが、ひとり舞い上がって以前から気になっていた河北ウイークリーの切り抜きを引っ張りだし、東北福祉大学の生涯学習支援室に入学願書を出した。大学教授会で可否は審議されるらしい。ひと波乱あろうかと身構えてしまいが、あっけなく入学許可が下り、私は、晴れて東北福祉大学の履修証明社会人コースの学生となった。

生涯学習

アメリカでは、大学には老若男女さまざまな人たちが机を並べて学んでいるそうだ。もちろん適齢期

(?)の若者が大多数だろうが、それでもクラスルームに年配の大人たちがいるのは至極当たり前なんだという。また、ドイツでも、学校を卒業していったん職に就いたとしても、必要に応じてまた大学に入り直し学びを再開するってえのが特別でも何でもないらしい。いずれも聞いた話で詳細はわからぬが、アチラでは、社会として“生涯学習”が違和感なく受け入れられているということだろう。それって素敵なことではないだろうか。

大学に戻ろうといったん決めてしまえば、これまでよりずっと主体的に学習に手が届くものだ。受験や資格取得のために意図的に知識を詰め込むのは、それはそれで素晴らしい。他方、自然に勉強したくなって、手をスッと伸ばせば知りたかったことをつかんでいる、みたいな感覚で知見が深まっていく。大人（おじさん）としては、むしろ、そのほうがカッコイイと思うが、いかが？

30年ぶりのキャンパス

久方ぶりのキャンパスは様子が一変していた。まず、学生は勉強する。東北福祉大学には学習ホール（自習室）やキャリアセンター（就職支援室のようなもの）があるが、朝に夕にそこに詰めている学生たちがいて、一心不乱に机に向かっているではないか。

さらには、今の大学は教え方も劇的に進化していた。私の時代は、授業といえば先生が一人喋るだけの座学中心の一方的教授法だったが、いまやデジタル・テクノロジーは当たり前。サイトの閲覧やYouTube（ネット動画閲覧サイト）が授業プランに自然に組み込まれ、視覚的に楽しいだけではない、学習への興味を喚起され、わかりやすいつたら、ありゃしない。さらに、もはや板書なぞなくて、教室のモニター/スクリーンに資料が投影されるのが常。その情報密度は黒板書きに比べればべらぼうに高い。そりゃそうだ、先生方が綿密に事前準備されているものである。

だからといって、座って見てりゃ済むわけじゃない。授業のフィードバックとして、終業時に“リアクションペーパー”（原稿用紙）に授業の感想文を書くことも多い。それも紙で提出する代わりに、スマホやパソコンで送信することもある。（インターネット上の学内ポータルサイトを通して）

今どきの大学は、授業中のインプットもアウトプットも格段に多く、すっごくハイテクなのだ。

気がかり vs 嬉しかったこと

心配は実はあまりしなかったが、それでもいい歳したオジサンがクラスルームにいたら浮いちゃって肩が狭いかなと思ってたものの、杞憂だった。娘ほど歳の離れた女子学生も普通に接してくれたし、クラスメートには留学生もいて、社会人学生だからといって遠慮を微塵も感じることはない。レポート提出の課題や前述のリアクションペーパーにはたしかに当初手を焼いたが、そのうちに、スラスラとはいかないまでも、意外に慣れるものだ。

一方、授業の質や充実度に比して申し訳ないくらい圧倒的に学費が安いのは、何と云ってもうれしい。街のカルチャーセンターでもこんなに安くないぞ。大バーゲン価格のようなものである。

大学に戻ってしばらくすると、「結構、オレ、いけるいける。まだまだ通用するやん」と、社会人学生としての“根拠のない自信”がついてくる。この感覚はひさびさだ。きっと、大いなる勘違いなんだろうが、

正直、うれしい。カン違い、大いに結構。変な自信がついたオジサン学生は怖いもの知らずだ。もちろん、それなりにプレッシャーはある。ただ、それまでの安穩とした生活では持ちえなかったこの感覚（プレッシャー）さえ、ある意味ワクワクする。

大学生になろう。

そんなこんなで、社会人学生になって一年後の今、振りかえれば、学習の、いや成長の実感が大いにある。オジサンだって、成長したり向上できるのだ。突き詰めれば、この成長実感こそ、社会人学生を頑張ったことの最大の“ご褒美”だと言いたい。

そう、誰だって自然な欲求としての学習願望（学びたい、という気持ち）があるんじゃないか。ならば、その思いに身を任せて学生に戻って見ないか。年齢なんていくつだっていいじゃないか。

さあ、行くぜ、福祉大。

謝辞：生涯学習支援室の皆様、そして各講義の先生方には本当にお世話になり感謝申し上げます。

一年間の長丁場を乗り切ることができたのも、先生方がフレンドリー（気さく）で教え方がとてもうまく、ノリノリで学べたからに他なりません。

英語Ⅲのケネス先生、実用英語の太田先生、国際関係論の長谷川先生、文化人類学の安藤先生、そして政治学原論の萩野先生、ほんま、おおきに！

